

フィルハーモニア・チューリッヒの音で描く 千一夜物語絵巻

フィルハーモニア・レコードが起動してから3年になるが、このところ、チューリッヒ歌劇場のオペラ公演でも「フィルハーモニア・チューリッヒ」の音が度々聴かれるようになった。2001年にドイツのオペラ専門誌「Opernwelt」が選んだ年間最優秀歌劇場管弦楽団に選ばれたこのオーケストラは、指揮者によって柔軟に変わる実力を持ってはいたわけだが、最近ほどの指揮者が来て、特に弱音で独特な雰囲気醸し出すようになり、その緊張感の共有がエキサイティングで癖になりそうである。

彼らの最新CDリムスキー＝コルサコフ作曲《シェエラザード》でもそれを体験する事が出来る。楽曲中でガラス細工のように繊細かつリアルな語り部の役割を担うバルトロメイ・ニツィオル氏に、現在のフィルハーモニア・チューリッヒについて語って貰った。

「私が当楽団の第一コンサートマスターに就任した頃は、ベレイラ総裁のコンセプトに則って豪華キャストに焦点が当てられていました。アーノクールやドホナーニ、サンティら著名な指揮者を招き、後にウェルザー・メストと契約しました。ピョートル・ベチャーワやヨナス・カウフマ

ンらは当歌劇場が有名にしたと自負しています。その後ダニエレ・ガッティという良い指揮者も迎えましたが、オケを改革することはありませんでした。そして現在の総裁であるホモキがマエストロ・ルイーゼを連れて来てくれたのですが、彼はオケの音色について細かく面倒をみってくれる指揮者で、もっと交響曲を弾けるようにと、改名してくれたほどです。そしてオーケストラとしてツアーを組んでくれた初めての指揮者でした。今年も、中国ツアーは中止になってしまいましたが、アンネ＝ゾフィ・ムターをソリストに迎えてドイツ・ツアーに出ますし、来年はスペイン・ツアーが控えています。次は是非日本へツアーに出たいです。」

ポーランド出身のニツィオル氏にとってロシア音楽は幼少の頃から身近な存在だったが、彼の思い描いていたシェエラザードと同じ方向でリハーサル中に音楽が描かれていったという。様々な色合いを持つ響きが織り成す異国情緒あふれる音楽作りは、まるで絵を描いているようで、その一筆一筆を運ぶタッチが特別な雰囲気醸し出して行く。そして最後にはオリエンタルな匂いすら漂ってくるような、まさに五感に訴えかける仕上がりになったと楽団員も大満足している。これが通常のコンサートと同じ5回のみでのリハーサルでライブ録音された物だという事

実に驚嘆を覚えるのだが、シーズン最後のコンサートで疲れていたものの、ルイーゼの指揮にインスピレーションを得て、アドレナリン全開で本番に臨んだのだという。その「演奏する喜び」がCDからも伝わってくるだろう。

オーケストラにとって、舞台上で演奏する交響曲はソリストとして扱われているようなもので、その体験はモチベーションを上げる効果がある。この効果が、オーケストラピットに降りて演奏しても継続され、演奏意欲が増すのだという。そしてまた、シンフォニーコンサートで共有した体験や、ツアーでの日々が団員の結束力を高めるようだ。その上ルイーゼの姿勢も団員に尊敬されている。「マエストロは常にハードスケジュールをこなしているのに、いつも親切で機嫌がいい。それはニューヨークから飛行機で戻って来て直接リハーサルに来た時でも変わらず、その驚異的エネルギーとポテンシャルには感動を覚える」という。気分屋のご機嫌をとりながらピクピクしないで済み、一緒に音楽を奏でる喜びだけを享受出来るのだという。

2週間前にはワグナーの序曲集に続く、ヴェルディの序曲集を録音したという。楽しみは尽きない。

2017年2月

中 東生(スイス在住、音楽ジャーナリスト)